

# 女子中学生・高校生のキャリア意識

— クラスター別に見た進路選択成熟度とサポート希求 —

Career Attitudes of Female High-school Students

宗方 比佐子 宮本 彩子

Hisako MUNEKATA

Ayako MIYAMOTO

## 【問題と目的】

Savickas (2001) によれば、青年期の主要なキャリア発達課題は職業的好みの明確化、職業的好みに基づく職業選択、選択した職業への就業とされる。しかし、現代の青年にとってこれらの課題を達成することは容易なことではなく、ニートやフリーターが累積している今日の日本の現状をかんがみる時、多くの若者にとって教育の場から職業の場への移行は困難な課題といわざるを得ない。文部科学省 (2006) は、小学校からキャリア教育を導入する方針を立て、人間関係形成、情報活用、将来設計、意思決定の4領域の能力・態度を習得させることを目指しているが、若年者に対するキャリア教育の歴史はいまだ浅く、有効な実践に至っていない。特に、高校生以下の児童・生徒のキャリア意識やキャリア支援に関する研究は乏しい。また、日本の現代社会の特殊性を考慮した上で、若者の職業的自律を促すために有効なキャリア教育がいかにあるべきかの答えは、十分に得られていない (宗方, 2007; 2009)。

Hartung, Porfeli, & Vondracek (2005) は、児童のキャリア発達研究を概観し、家族の社会経済的地位や職業が子どものキャリア

成熟度に強く関連していることを明らかにした。また、Keller & Whiston (2008) らは、保護者と親密なコミュニケーションをもち、家族間に相互理解や信頼関係がある場合には、中学生のキャリア成熟度が高まることを示唆している。一方で、保護者からの情報提供、励ましといった具体的な行動は、必ずしも中学生のキャリア成熟度を高めなかったとしている。新見・前田 (2008) によれば、家族や友人とのコミュニケーションが職業選択の基盤となる能力・態度・知識等の自己評価を高めることから、コミュニケーションがキャリア意識の発達に寄与する可能性を示唆している。これらの研究から分かることは、中高生にとっては、家族や周囲との人間関係、コミュニケーションがキャリア意識を向上させる重要な要因となる可能性が高いことだ。中高生の生活が安定しており、幸福感があることが、将来の職業や生き方をポジティブに考えられるからではないかと推測される。この視点は、Skorikov (2007) の研究からも示唆される。彼は、高校2年から卒業後半年までの縦断データを分析し、各時期の生活満足度と社会的適応がキャリア成熟度と強く関連していることを明らかにした。キャリア成熟群は生活満足

度が高く、社会適応も良好であった。日本の研究においても、同様のことが示されている。佐藤・広田・向井（2009）によれば、過去・現在・将来に対する不満が少なく、未来志向的である中学生ほど、自分のキャリアを考えるにあたり成長という視点を持つことが示唆される。

三後・金井（2003）は、高校生の進路選択において自己決定経験とキャリアモデルの重要性を指摘している。この研究によれば、自己決定経験があることとキャリアモデルが存在することは、キャリア・パースペクティブの形成に寄与し、キャリア・パースペクティブは適職探索効力感、進路相談効力感、情報収集効力感を高め、就職不明不安を低め、自立意欲を高める。中高生にとって、どのような生活環境や生活経験がキャリア意識を向上させるのかを明らかにすることは、キャリア教育の進展にかかせない課題である。

そこで本研究は、愛知県下の私立女子中学・高校に在籍する生徒を対象として、キャリア意識に関する調査を実施し、女子中学生・高校生がどのようなキャリアサポートを求めているか、それは職業成熟度、職業興味、職業能力感とどのような関連があるかを明らかにすることを目的とする。

### 【方法】

**調査対象** 私立女子中学2年生（206名）と、私立女子高校2年生（312名）の計518名を調査の対象とした。有効回答数は中学生が201（97.6%）、高校生が296（94.9%）であった。

**調査時期および実施状況** 2008年7月に、各クラスの担当教員がホームルーム等の時間中に配布、実施、回収を行った。

**調査内容** 質問紙は以下の種類の内容によって構成された。(1)将来なりたい職業：将来な

りたいと思っている、または興味のある職業を出来るだけたくさん書くよう自由記述での回答を求めた。(2)進路についての相談：誰にどの程度したいのかを尋ねるために、8種類の相談対象に対して、「まったく相談したくない」から「非常に相談したい」の4件法で回答を求めた。(3)進路相談の内容：16種類のサポート内容に対して、自分がどの程度受けたいかを「まったく受けたくない」から「非常に受けたい」の4件法で回答を求めた。(4)職業レディネス：職業に就くことに対し、どの程度「成熟」した考えを持っているかを調べるため、宗方（2002）の職業レディネス尺度を使用した。下位尺度は、①職業選択への関心、②選択範囲の限定性、③選択の現実性、④選択の主体性、⑤自己知識の客観性からなり、全15項目である。「まったく当てはまらない」から「非常に当てはまる」の4件法で回答を求めた。(5)職業能力感：仕事上において必要な作業や活動を行うことに対してどの程度自信があるかを尋ねた（宗方 2002）。下位尺度は、①対人能力、②論理推考能力、③対物能力、④データ処理能力の4下位尺度からなり、全16項目である。「まったく自信がない」から「非常に自信がある」の4件法で回答を求めた。(6)職業能力開発興味：どのような職業分野に関心があるのかを調べるため、宗方（2000；2001；2002）が開発した職業興味測度を参考に、「機械器具の組み立て」など、女子中高生が選択することが少ないと思われる項目を除き、近年女子中高生に人気のある「パティシエ」や「エアライン関係」の職業を加えて47項目からなる尺度を再編成した。「まったく関心がない」から「非常に関心がある」の4件法で回答を求めた。

【結果】

進路についての相談 表1は、進路についての相談を誰にどの程度したいかを中高で比較したものである。高校生のほうが中学生に比べ、全ての質問項目で平均点が高く、様々な人に相談したいと感じていることがわかる。また、「自分がなりたい職業に就いている人」に相談にのってもらいたいと選択した生徒は中学生、高校生ともに最も高く、高校生が3.51、中学生が3.11であった。次いで中高生ともに「家族」を選択したものが多く、高校生が3.13、中学生が2.84であった。中学生と高校生を比較してみると、中学生では、「学校の先生」の平均値が低いことがわかる。「友人」以外の「同じ学校の先輩」「自分がなりたい職業についている人」「家族」「学校の先生」の項目については、t検定の結果、中高生に1%水準で有意差が認められた。「その他」については、自由記述欄を設けていたが、その他を選択していても具体的な記述はなかったことから、相談相手はほぼ網羅されていたと思われる。

表1 中高別にみた進路についての相談の程度

	高校(N = 296)		中学(N = 201)		t 値
	平均値	SD	平均値	SD	
同じ学校の先輩	2.63	0.93	1.91	0.88	8.55 **
自分がなりたい職業についている人	3.51	0.68	3.11	0.86	5.76 **
家族	3.13	0.81	2.84	0.91	3.75 **
学校の先生	2.72	0.85	1.95	0.83	9.93 **
進路専門のカウンセラー	2.73	0.94	2.37	0.97	4.19 **
実際に働いている人 (自分がなりたい職業以外についている人)	2.94	0.92	2.43	0.99	5.81
友人	2.89	0.85	2.73	0.86	1.94
その他	1.73	1.16	2.00	1.22	-0.97

\* 5%水準で有意差あり \*\* 1%水準で有意差あり

受けたサポート内容 受けたサポートの内容に関して主因子法プロマックス回転による因子分析を行ったところ、表2から分か

るように4つの因子が抽出された。第1因子は「具体的に世の中にどんな仕事があるのか知りたい」「具体的に世の中にどんな会社があるのか知りたい」などであることから「仕事情報因子」(3項目,  $\alpha=0.758$ )と名づけた。第2因子は「実際に働いている人の話が聞きたい」「職業体験がしたい」「なりたい職業にどんなスキルが必要か知りたい」などで「見聞・体験因子」(5項目,  $\alpha=0.803$ )と名づけた。第3因子は「大学受験の方法について知りたい」「どんな大学, または高校があるのか知りたい」などで「大学情報因子」(3項目,  $\alpha=0.803$ )と名づけた。第4因子は「進路の悩みを学校の先生に聞いて欲しい」「進路の悩みを進路専門のカウンセラーに聞いて欲しい」などで「進路相談因子」(3項目,  $\alpha=0.825$ )とした。

受けたサポートの因子分析結果から抽出された下位尺度ごとに、中高生の下位尺度得点を比較したものが表3である。「大学情報」を除く「見聞・体験」「仕事情報」「進路相談」で高校生の得点が高く、統計的な有意差が検出された。下位尺度による得点傾向は中学生、高校生間で類似しており、一番高いサポート内容が「見聞・体験」、次に「大学情報」「仕事情報」が続き、最も低い得点を示したのが「進路の相談」であった。中高生ともに、実際に自分自身で体験したり、実際に働いている人からの話を直接聞くことを望んでいることがわかる。また、高校や大学に進むことがまずは大きな関心事であることも明らかとなった。

職業レディネス 表4からわかるように、職業レディネスの得点は全体的に高校生が中学生より高く、統計的にも1%水準の有意差が検出された。すなわち、職業選択の成熟度に関しては主体性、現実性、興味・関心、限定性、客観性の側面から中学生より高校生で

表2 受けたいサポートの因子分析結果

項目内容	パターン行列				因子抽出後の 共通性
〈仕事情報因子〉					
具体的に世の中にどんな仕事があるのか知りたい	<b>0.96</b>	-0.21	0.00	0.04	0.75
具体的に世の中にどんな会社があるのか知りたい	<b>0.87</b>	-0.13	-0.11	0.10	0.61
自分がどんな職業に向いているのか知りたい	<b>0.51</b>	0.09	-0.05	-0.03	0.28
〈見聞・体験因子〉					
実際に働いている人の話が聞きたい	-0.17	<b>0.79</b>	-0.07	0.10	0.51
職業体験がしたい	-0.17	<b>0.74</b>	-0.11	0.01	0.39
なりたい職業にどんなスキルは必要か知りたい	0.15	<b>0.55</b>	0.12	-0.05	0.50
就職活動の流れを知りたい	0.28	<b>0.54</b>	0.00	0.00	0.56
具体的職業について知りたい	0.34	<b>0.43</b>	0.09	-0.04	0.53
〈大学情報因子〉					
大学受験の方法について知りたい	-0.18	-0.10	<b>0.91</b>	0.12	0.70
どんな大学、または高校があるのか知りたい	0.08	-0.10	<b>0.82</b>	-0.09	0.63
大学の学部や、学科の内容について知りたい	0.03	0.13	<b>0.63</b>	0.01	0.53
〈進路相談因子〉					
進路の悩みを学校の先生に聞いて欲しい	0.08	-0.10	0.01	<b>0.78</b>	0.62
進路の悩みを進路専門のクンセラーに聞いて欲しい	0.01	0.13	-0.03	<b>0.74</b>	0.63
個別に進路相談が出来る時間をもっと増やして欲しい	0.00	0.08	0.07	<b>0.71</b>	0.62
因子寄与	6.07	1.61	1.43	1.26	10.36
因子寄与率 (%)	37.91	10.05	8.97	7.85	64.78
累積寄与率 (%)	37.91	47.96	56.93	64.78	

表3 中高別にみた受けたいサポート

	高校(N=296)		中学(N=201)		t 値
	平均値	SD	平均値	SD	
見聞・体験	3.45	0.53	3.25	0.56	4.03 **
仕事情報	2.86	0.65	2.38	0.69	7.81 **
大学情報	3.10	0.75	3.11	0.80	-0.03
進路相談	2.55	0.77	1.96	0.70	8.54 **

\* 5%水準で有意差あり \*\* 1%水準で有意差あり

表4 中高別に見た職業レディネス得点

	高校(N=296)		中学(N=201)		t 値
	平均値	SD	平均値	SD	
職業選択への関心	3.00	0.59	2.67	0.67	5.84 **
選択範囲の限定性	2.68	0.80	2.23	0.86	5.96 **
選択の現実化	3.07	0.55	2.84	0.57	4.37 **
選択の主体性	3.15	0.62	2.91	0.66	4.06 **
自己知識の客観性	2.63	0.65	2.39	0.75	3.88 **

\* 5%水準で有意差あり \*\* 1%水準で有意差あり

準備状態が整っていることが示された。下位尺度別に得点をみると、高校生、中学生ともに最も平均値が高いものは「選択の主体性」であり、次に「選択の現実性」が高かった。中学生では「選択範囲の限定性」が最も低く、高校生では「自己知識の客観性」が最も低かった。

**職業能力感** 職業能力感の下位尺度は先行研究にしたがい4因子を採用した。表5は、4下位尺度の得点を中高別に示したものである。中学生より高校生の方が全体的に値が高

い。最も高いものは中学生、高校生とも「対人能力」であり、次いで「論理推考能力」が高かった。最も低いものは、中学生、高校生とも「対物能力」であった。また、中高生の得点を比較すると、「対物能力」「論理推考能力」「データ処理能力」で1%水準の有意差がみられ、「対人能力」で5%水準の有意差がみられた。

**職業能力開発興味** 今回用いた職業興味尺度は大学生用の尺度項目の一部を入れ替えているため、因子分析を行い新たに下位尺度を

表 5 中高別に見た職業能力感得点

	高校(N=296)		中学(N=201)		t 値
	平均値	SD	平均値	SD	
対人能力	2.48	0.67	2.32	0.69	2.52 *
論理推考能力	2.45	0.62	2.13	0.65	5.57 **
対物能力	2.21	0.71	1.95	0.68	4.07 **
データ処理能力	2.31	0.65	2.01	0.67	4.96 **

\* 5%水準で有意差あり \*\* 1%水準で有意差あり

構成することとした。表7に示したように、因子分析(主因子法, プロマックス回転)の結果6つの因子が抽出された。第1因子は「金融関係」「国家公務員」「一般事務」など、全体的に堅実で、堅いイメージの職業が集まったグループであることから、「堅実系因子」( $\alpha=0.838$ )とした。第2因子は「障害者社会福祉」「高齢者社会福祉」「心理カウンセラー」などのグループであることから、「福祉系因子」( $\alpha=0.878$ )とした。第3因子は「マスコミ関係」「服飾関係」「エアライン」など、華やかなイメージを持つ職業のグループであることから、「華やか系因子」( $\alpha=0.812$ )とした。第4因子は「コンピューター技師」「コンピューターソフト関係」などのグループであることから、「IT系因子」( $\alpha=0.777$ )とした。異質な存在として「美術関係」がこの因子内にあるが、おそらく「コンピューターソフト関係」の中のゲームソフトの開発やウェブデザインなどを連想したのではないかと推測される。第5因子は「医師・歯科医師」「医療関係の技師」などのグループであることから、「医療系因子」( $\alpha=0.849$ )とした。第6因子は「中学校・高等学校の教員」「幼児教育」などのグループであることから、「教育系因子」( $\alpha=0.789$ )とした。各因子とも信頼性計数Cronbachの $\alpha$ を算出したところ、上記のように十分な値が得られたことから、下位尺度としての内的整合性は保証さ

表 6 職業能力開発興味の項目平均, SD, t 値

	高校(N=296)		中学(N=201)		t 値
	平均値	SD	平均値	SD	
堅実系	1.92	0.63	1.62	0.49	5.77 **
福祉系	1.87	0.70	1.56	0.53	5.23 **
華やか系	2.23	0.69	2.25	0.68	-0.36
IT系	1.86	0.65	1.57	0.55	5.05 **
医療系	1.86	0.81	1.95	0.82	-1.26
教育系	1.97	0.82	1.94	0.70	0.44

\* 5%水準で有意差あり \*\* 1%水準で有意差あり

れたといえる。

表6からわかるように中学生・高校生とも、「華やか系」の職業に最も高い興味を示している。その他の因子では常に高校生が中学生よりも高い値を示していたが、「医療系」のみ、高校生よりも中学生が高い値を示した。一番低いものは「福祉系」で、高校生が1.87、中学生が1.56であった。また、「堅実系」「福祉系」「IT系」において、中高生の平均に1%水準で有意差が認められたが、「華やか系」「医療系」「教育系」では有意差は見られなかった。

**クラスター分析の結果** 職業能力感(対人能力, 論理推考能力, 対物能力, データ処理能力の4下位尺度)と職業能力開発興味(堅実系, 華やか系, 福祉系, IT系, 医療系, 教育系の6下位尺度)の類似性という側面から調査対象をグループ化するため, 中学生, 高校生をあわせたサンプルを用いて大規模ファイルのクラスター分析を行った。分析の結果, 8つのクラスターに分けることが適当と考えられた。図1は, 各クラスターの下位尺度得点を示したものであり, この結果から各クラスターの特徴を理解することができる。

表8は, 各クラスターに所属する人数を中高別に示したものである。以下に, 各クラスターの特徴および所属人数について説明する。第1クラスター: 職業能力感と職業興味が共に高く, 8クラスターの中で, 対人能力, 論

表7 職業能力開発興味の因子分析結果

項目内容	パターン行列						因子抽出後の 共通性
〈堅実系因子〉							
金融関係（銀行員，証券会社職員など）	<b>0.74</b>	-0.04	-0.06	0.07	0.02	0.00	0.55
会計や税務関係（公認会計士，税理士など）	<b>0.71</b>	-0.05	-0.12	0.02	0.17	-0.09	0.51
国家公務員（国の省庁に勤める職員）	<b>0.70</b>	-0.02	-0.18	-0.05	-0.01	0.19	0.48
法律関係（裁判官，検察官，弁護士など）	<b>0.63</b>	-0.08	-0.09	-0.06	0.16	0.02	0.38
地方公務員（市役所，区役所の職員など）	<b>0.62</b>	0.00	-0.16	0.02	-0.06	0.28	0.48
一般事務（文書整理，帳簿の管理の仕事など）	<b>0.61</b>	0.08	-0.06	0.04	-0.02	-0.01	0.40
経営関係（経営コンサルタント，産業カウンセラーなど）	<b>0.61</b>	0.15	0.07	0.08	-0.05	-0.11	0.49
人文，社会科学系の研究者（経済学，社会学，哲学などの分野）	<b>0.57</b>	0.16	-0.16	0.06	-0.10	-0.10	0.34
保険関係（保険代理業，保険の外交など）	<b>0.57</b>	0.08	-0.01	0.04	0.05	0.04	0.42
語学関係（通訳・翻訳などの仕事）	<b>0.46</b>	-0.01	0.18	-0.26	0.08	-0.02	0.26
〈福祉系因子〉							
障害者社会福祉（福祉施設の職員など）	-0.08	<b>0.86</b>	-0.09	0.05	0.04	-0.01	0.71
高齢者福祉（老人介護ヘルパー，養護老人ホーム職員など）	-0.03	<b>0.75</b>	-0.02	-0.06	0.02	0.07	0.58
心理カウンセラー（臨床心理士，学校カウンセラーなど）	0.14	<b>0.73</b>	0.03	-0.10	-0.08	-0.13	0.49
心理判定員（児童相談所，少年鑑別所などでの心理判定の仕事）	0.08	<b>0.71</b>	0.06	-0.04	-0.09	-0.01	0.52
障害児教育（養護学校の教員，聾学校の教員など）	-0.03	<b>0.71</b>	-0.01	0.01	0.02	0.09	0.57
社会復帰援助の仕事（ケースワーカー，ソーシャルワーカーなど）	0.21	<b>0.64</b>	-0.02	0.02	-0.01	-0.05	0.51
非行少年・犯罪者の更生指導（少年院や教護院の教員，刑務所の看守など）	0.07	<b>0.51</b>	-0.05	0.19	-0.01	0.11	0.44
〈華やか系因子〉							
美容の職業（美容師，エステ，ネイルアートなど）	-0.21	0.03	<b>0.84</b>	-0.04	0.05	-0.12	0.59
服飾関係（服飾デザイン，仕立て，ファッションなどの仕事）	-0.03	-0.04	<b>0.75</b>	0.01	-0.01	0.03	0.49
フード（パティシエ，料理研究家など）	-0.15	0.07	<b>0.68</b>	0.01	0.17	-0.02	0.49
エアライン（キャビンアテンダント，グラウンドホステスなど）	0.03	-0.13	<b>0.59</b>	-0.33	0.12	-0.05	0.47
フラワー（アレンジメント，花屋など）	-0.09	0.18	<b>0.56</b>	0.07	0.03	0.01	0.41
流通関係（デパート，商店での商品仕入れや販売）	0.35	0.01	<b>0.48</b>	-0.01	-0.09	-0.08	0.43
マスコミ関係（テレビ番組の制作，アナウンサーなど）	0.14	-0.23	<b>0.48</b>	0.20	-0.15	0.07	0.38
演劇関係（映画俳優，舞台俳優，舞踏家など）	-0.15	-0.05	<b>0.45</b>	0.16	0.00	0.20	0.29
〈IT系因子〉							
コンピューター技師（プログラマー，システムエンジニアなど）	-0.01	-0.03	-0.08	<b>0.90</b>	0.05	-0.10	0.74
コンピューターソフト関係（パソコンソフトやゲームソフトの開発など）	-0.13	0.04	-0.06	<b>0.89</b>	0.05	-0.11	0.69
電子通信関係（インターネットに関わる仕事など）	0.18	-0.05	-0.08	<b>0.66</b>	0.05	-0.12	0.51
広告関係（コピーライター，広告記事の編集など）	0.25	-0.05	0.21	<b>0.47</b>	-0.21	-0.01	0.47
自動車整備士（自動車の点検・整備などの仕事）	0.10	0.17	0.02	<b>0.37</b>	0.14	0.06	0.37
美術関係（画家，彫刻家，写真家，人形作家など）	-0.29	0.07	0.12	<b>0.36</b>	0.00	0.18	0.20
〈医療系因子〉							
医師・歯科医師（病院，クリニックなどの医師）	0.01	-0.08	0.05	0.00	<b>0.88</b>	0.00	0.74
医療関係の技師（レントゲン・血液検査・歯科などの技師）	0.06	0.01	-0.04	0.10	<b>0.77</b>	-0.07	0.63
薬剤師（病院・薬局での薬剤調合など）	0.07	-0.08	0.04	-0.02	<b>0.72</b>	0.00	0.52
保健医療（看護師，助産師など）	0.02	0.20	0.16	-0.02	<b>0.57</b>	0.01	0.52
〈教育系因子〉							
中学校・高等学校の教員	0.05	-0.02	-0.09	-0.08	-0.06	<b>0.88</b>	0.70
小学校の教員	-0.01	-0.01	0.04	-0.13	-0.05	<b>0.86</b>	0.68
大学の教員	0.23	-0.02	-0.14	0.04	0.15	<b>0.48</b>	0.38
幼児教育（保育士，幼稚園の先生）	-0.08	0.27	0.22	-0.20	0.00	<b>0.45</b>	0.44
因子寄与	10.81	3.56	3.47	2.66	2.34	1.96	24.81
因子寄与率（%）	23.00	7.58	7.38	5.66	4.98	4.18	52.78
累積寄与率（%）	23.00	30.58	37.96	43.62	48.60	52.78	

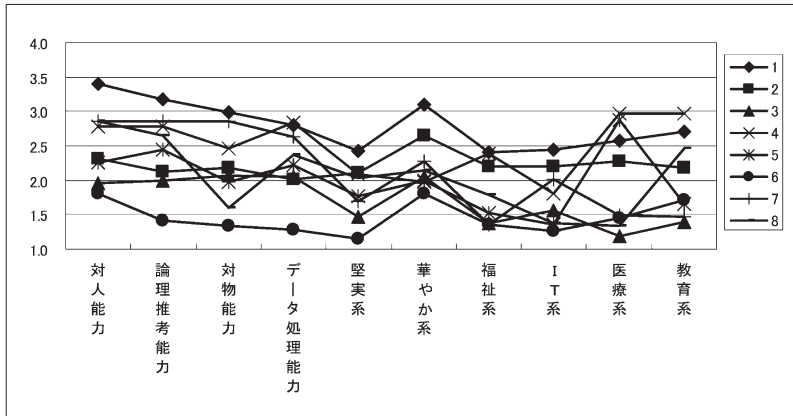


図1 クラスタ分析の結果

表8 中高別にみた各クラスターの所属人数

	高校生		中学生		合計	
	N	%	N	%	N	%
華やか系・高能力感	20	7.4%	11	5.9%	31	6.8%
華やか系・中能力感	61	22.4%	30	16.2%	91	19.9%
低興味・中能力感	53	19.5%	27	14.6%	80	17.5%
教育、医療・理系能力感	24	8.8%	7	3.8%	31	6.8%
医療・中能力感	19	7.0%	34	18.4%	53	11.6%
低興味・低能力感	14	5.1%	42	22.7%	56	12.3%
興味拡散・高能力感	38	14.0%	15	8.1%	53	11.6%
教育・文系能力感	43	15.8%	19	10.3%	62	13.6%

理推考能力，対物能力で最も高い値を示している。自分の能力に対して自信を持っていることが窺える。職業興味は全体的に高い値を示しているが，特に華やか系の職業に高い関心を持っていることから，第1クラスターを「華やか系・高能力感クラスター」と名づけた。このクラスターの人数は，高校生20人（7.2%）中学生11人（5.9%），合計31名（6.8%）であった。

第2クラスター：職業能力感と職業能力開発興味が共に中程度に高く，職業開発興味に対しても華やか系が他の項目に比べ高い値を示しているが，他はすべて同程度であり，いろいろな職業に興味が分散している。したがって第2クラスターを「華やか系・中能力感クラスター」と名づけた。このクラスターの人

数は，高校生61名（22.4%），中学生30名（16.2%），合計91名（19.9%）であり，全クラスター中最も多い人数を占めた。特に，高校生では最も人数の多いクラスターである。

第3クラスター：職業能力感の中程度であるにもかかわらず，職業興味が全体的に低く，特に医療系，教育系への興味が低い。したがって第3クラスターを「低興味・中能力感クラスター」と名づけた。このクラスター的人数は，高校生53名（19.5%），中学生27名（14.6%），合計80名（17.5%）であり，第2クラスターの華やか系・中能力感群に次いで所属人数が多いクラスターである。

第4クラスター：職業能力感が全体的に高く，特にデータ処理能力はクラスター中，最も高い値を示した。職業興味についても全体的に高く，医療系と教育系に対して全クラスター中で最も高い関心を持っている。したがって第4クラスターを「教育医療・理系能力感クラスター」と名づけた。このクラスター的人数は，高校生24名（8.8%），中学生7名（3.3%），合計31名（6.8%）であり，中学生では最も人数の少ないクラスターである。

第5クラスター：能力感の中程度であり，中では論理推考能力とデータ処理能力が若干高い。職業興味でほかの職業に比べて医療系

に高い関心を持っている。したがって第5クラスターを「医療・中能力感クラスター」と名づけた。このクラスターの人数は、高校生19名(7.0%)、中学生34名(18.4%)であり、合計53名(11.6%)であった。

第6クラスター：職業能力感、職業興味ともに、クラスターの中で最低レベルにある。したがって第6クラスターを「低興味・低能力感クラスター」と名づけた。このクラスター的人数は、高校生14名(5.1%)、中学生42名(22.7%)、合計56名(12.3%)であった。中学生では最も人数の多いクラスターであったが、高校生では最も人数の少ないクラスターである。

第7クラスター：職業能力感は全体的に非常に高いにもかかわらず、職業能力開発興味では低い値を示している。華やか系の職業に関しては若干興味があるものの、福祉系、医療系、教育系ではかなり低い値を示している。したがって第7クラスターを「興味拡散・高能力感クラスター」と名づけた。このクラスター的人数は、高校生38名(14.0%)、中学生15名(8.1%)、合計53名(11.6%)であった。

第8クラスター：職業能力感の中の対人能力や、論理推考能力は高い値を示しているが、対物能力が極端に低い。職業興味ではIT系、

医療系に対しては最低レベルの興味であるのに対し、教育系に高い関心を持っている。したがって第8クラスターを「教育・文系能力感クラスター」と名づけた。このクラスター的人数は、高校生43名(15.8%)、中学生19名(10.3%)、合計62名(13.6%)であった。

クラスター別にみた「求めるサポート」

表9より、どのクラスターにおいても一番求められているサポートは「見聞・体験」であり、次いで求められているのが「大学情報」であることがわかった。また、「華やか系・高能力感クラスター」は、全てのサポートを最も強く求めており、サポートに対する全体的な積極性が感じられた。逆に「低興味・低能力感クラスター」は、どのサポートに対しても一番低い値を示しており、サポートをあまり求めていないことがわかった。受けたいサポートのすべての項目において、クラスター間で1%水準の有意差が確認された。

クラスター別に見た職業レディネス 職業レディネスの5つの下位尺度である「職業選択への関心」「選択範囲の限定性」「選択の現実性」「選択の主体性」「自己知識の客観性」とともに、「華やか系・高能力感クラスター」の得点が最も高く、次に「興味拡散・高能力感クラスター」「教育・文系能力感クラスター」「教育・医療・理系能力感クラスター」が続

表9 クラスター別にみた受けたいサポートの平均値・SD

	見聞・体験		種類		高校・大学		相談	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD
華やか系・高能力感	3.58	0.50	2.99	0.65	3.38	0.70	2.64	0.69
華やか系・中能力感	3.39	0.47	2.83	0.58	3.21	0.66	2.52	0.65
低興味・中能力感	3.32	0.64	2.55	0.75	2.92	0.82	2.30	0.87
教育医療・理系能力感	3.41	0.49	2.62	0.64	3.10	0.77	2.31	0.72
医療・中能力感	3.27	0.57	2.54	0.59	3.29	0.57	2.22	0.80
低興味・低能力感	3.11	0.58	2.24	0.67	2.79	0.84	1.76	0.64
興味拡散・高能力感	3.44	0.60	2.72	0.76	3.27	0.83	2.20	0.85
教育・文系能力感	3.46	0.50	2.80	0.74	2.94	0.86	2.41	0.83
F 値	3.04**		5.93**		4.06**		6.31**	

\* 5%水準で有意差あり \*\* 1%水準で有意差あり



表10 クラスター別にみた職業レディネスの平均値・SD

	職業選択への関心		選択範囲の限定性		選択の現実性		選択の主体性		自己知識の客観性	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD
華やか系・高能力感	3.28	0.47	3.09	0.62	3.31	0.51	3.42	0.39	3.02	0.49
華やか系・低能力感	2.84	0.50	2.32	0.67	2.89	0.49	2.91	0.53	2.43	0.55
低興味・中能力感	2.77	0.65	2.34	0.82	2.87	0.55	3.00	0.72	2.48	0.62
教育医療・理系能力感	3.03	0.48	2.84	0.78	3.01	0.57	3.20	0.51	2.72	0.57
医療・中能力感	2.83	0.66	2.35	0.84	2.91	0.58	3.02	0.72	2.41	0.85
低興味・低能力感	2.32	0.77	1.99	0.92	2.63	0.64	2.67	0.69	2.04	0.74
興味拡散・高能力感	3.09	0.67	2.87	0.83	3.24	0.52	3.35	0.58	2.92	0.59
教育・文系能力感	3.06	0.57	2.69	0.84	3.15	0.51	3.22	0.62	2.70	0.68
<i>F</i> 値	10.87**		9.96**		8.35**		7.85**		11.46**	

\* 5%水準で有意差あり \*\* 1%水準で有意差あり

き、「低興味・低能力感クラスター」の得点が最も低かった。これらの結果から、職業興味は絞られて焦点化していることより、能力感の得点が高いことが職業レディネス得点の高さに関連していることが示唆された。

【考察】

**中学生の職業興味の構造** 今回の調査で使用した職業興味尺度は、宗方（2001；2002）が作成した大学生用の尺度である。大学生データによる因子分析の結果、「人間探求」「教育」「福祉・支援」「医療・保健」「操縦・保安」「機械技術」「IT」「経営実務」「公務・法務」「事務・営業」「生活デザイン」「マスコミ」の12因子が抽出されている。今回は、中学生・高校生が対象であるため、いくつかの項目を削除または追加して尺度を作り直し、因子分析を行った。その結果、「堅実系」「福祉系」「華やか系」「IT系」「医療系」「教育系」の6つの因子が抽出され、大学生の認識している職業のまとまりと、中学生が認識している職業のまとまりに明らかな違いが認められた。大学生は職業を業界で一まとまりとしているのに対し、中学生は、業界に関係なくイメージで職業をグルーピングしている。図2は、大学生の認識している職業のまとまりと、中学生が認識している職業のまとまりとの関連

を表したものである。大学生の因子に比べて中高生の因子は少なく、中学生は大学生に比

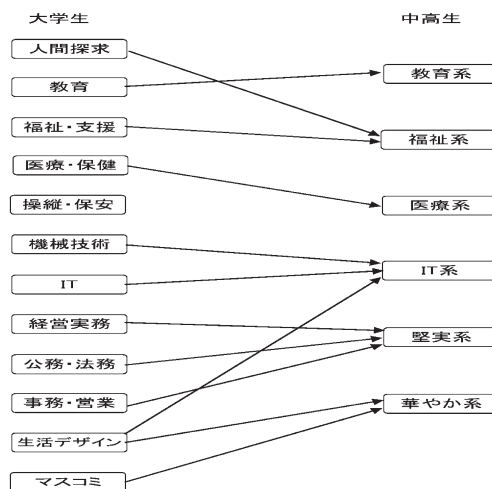


図2 大学生と中学生における職業能力開発興味の比較

べて職業をより大雑把に捉えていることがわかった。

この結果から、中学生の職業に関する知識の少なさが推測される。大学生にとっては就職というものが身近にあり、自分が将来どのようなところで働きたいのか、どのように社会と関わっていくのかなど働くことを高く意識しているため自ら調べたり、話を聞く機会も多いため、業界による認識が進んでいると考えられる。今回の調査の結果、約3割近い

生徒の職業興味が職業分野にかかわらず低いという結果が出ているが、職業に対する知識の少なさが興味の拡散や低下につながっている可能性がある。吉中・石井・下村・高綱・若松（2003）によれば、中学生から高校生に移行する時期に、職業的知識は広がるものの、職業的興味は少数の職業へと集中化・局限化される傾向があり、イメージできない仕事を調べようとする意欲は低く、中学生・高校生は未知の職業についての知識を拡大することに消極的であると結論づけている。

中高生のキャリアクラスター 宗方

（2005）は、大学生の4種類のキャリア変数（職業レディネス、職業能力感、職業興味、ワークスタイル）を用いてクラスター分析を行い、「マスコミ・デザインクラスター」「福祉・教育クラスター」「受身的事務職クラスター」「消極的拡散クラスター」「個性追求クラスター」「積極的模索クラスター」の6クラスターを抽出した。大学生のキャリアクラスターと今回の調査結果から導き出された中高生のキャリアクラスターを比較したものが図3である。かなり一致しているものを実線で、多少一致しているものは破線で示した。

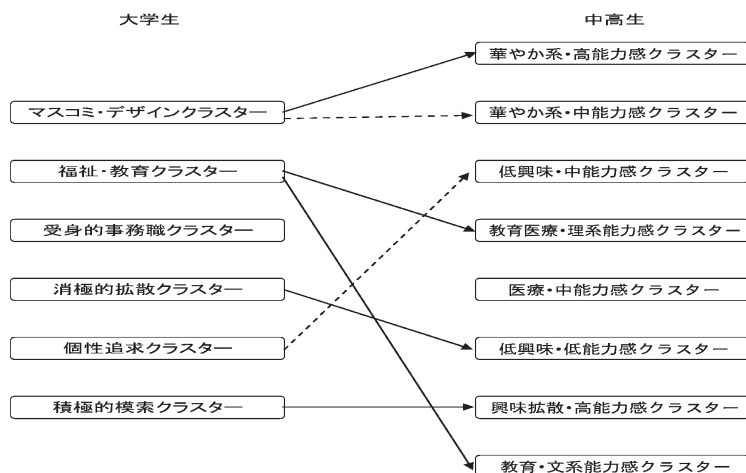


図3 大学生と中高生のキャリアクラスター比較図

大学生と中高生のキャリアクラスターの違いの1つは、大学生には医療のみのクラスターが出現していないことであるが、その理由は調査対象となった大学に医療系の学部学科がなかったことによる。医療の仕事は専門的な知識と技能、そして資格が必要である。そのため、医療系に進みたいと考えている人は高校卒業時点で専門学校や、医学部や歯学部、看護学科のある大学に進学をしたと考えられる。違いの2つ目は、大学生では業種ではな

く事務職という職種に興味が高いものが多いが、中高生ではその傾向がみられないことである。職業興味の堅実系因子が事務職に近いが、堅実系はクラスターにつながらなかった。中高生が「将来のなりたい職業」、つまり将来の夢ともいえるものは「キャビンアテンダント」や「美容師」などといった具体的な職業であることが多いため、事務という職種に対する興味が高くならなかったのではないかと推測される。また、大学生の「消極的拡散

クラスター」と中高生の「低興味・低能力感クラスター」は特徴が非常に共通しており、中高生の「低興味・低能力感クラスター」が大学の「消極的拡散クラスター」へと移行する可能性がある。

**中高生に対するキャリア支援** 今回の調査対象となった中高生のキャリア意識の傾向として、職業レディネスの「選択の主体性」が高く、職業能力感の「対人能力」が高いことがあげられる。また、職業興味については堅実な職業に興味が高いが、同時に華やかな職業に対しても高い興味を示している。受けてほしいサポートは、実際に体験をしたり、話を聞きたいと感じている。その相手には、自分があこがれている職業についている人に聞きたいと考えている傾向がみられた。

三後・金井(2003)は、キャリアモデルとなる人物がいることによって自分のキャリアに見通しを持つことができ、自己実現的な意欲を持つことにつながるというプロセスを提示した。また、自己決定経験もキャリアへの見通しを持つことにプラスの影響があり、自立意欲を高めるとしている。すなわち、高校生が就職に関して自己実現的に取り組むためには、キャリア・パースペクティブを持つことが重要であり、そのキャリア・パースペクティブを支えているのは過去の自己決定経験やキャリアモデルの存在であると考えられる。今回の調査結果によれば、中高生の相談したい相手として教師はあまり選ばれていない。教師は生徒にとって非常に身近な存在であり、進路相談や進路指導を受けるにも関わらず、今回の調査では先生に相談したいと答える生徒は少なかった。将来なりたい仕事に就いている人から話を聞く機会をつくるのがキャリア教育やサポートに必要なことである。また、職業興味を高めるための働きかけも非常に重要であろう。今回の調査では、どの職業

に対しても興味が低いとする者が中学生で69名、高校生で67名おり、中高合わせると136名いた。この人数は全体の約3割にあたる。もちろん、今回の職業興味尺度に含まれていない職業に興味がある生徒もありうるが、それにしても予想以上に多くの生徒が、働くということに対して興味が無い、またはほとんど考えたことが無いという可能性がある。

今わが国ではニートやフリーター対策が緊急の課題であり、種々の方策が講じられている(明石, 2006; 児美川, 2007; 宮城, 2006; 小杉・堀井, 2006)。学校教育の中にキャリア教育を必修として位置づけ、これまでの進路指導・進学指導を超えたキャリアカウンセリングの導入も検討されている。しかしまだまだ具体的かつ効果的なキャリア支援について、研究も緒についたところであり、まずは現実を正確に把握し、有効なキャリア教育とキャリア支援に向けて研究を蓄積する必要があるだろう。

#### 【引用文献】

- 明石要一 2006 学校教育の改革シリーズNo.7  
キャリア教育がなぜ必要か—フリーター・ニート問題解決への手がかり— 明治図書
- Hartung,P.J., Porfeli,E.J., & Vondracek,F.W. 2005 Child vocational development: A review and consideration. *Journal of Vocational Behavior*, 66, 385-419.
- Keller,B.K., & Whiston,S.C. 2008 The role of parental influences on young adolescents' career development. *Journal of Career Assessment*, 16, 1980-217.
- 児美川孝一郎 2007 若者の希望と社会 権利としてのキャリア教育 明石出版
- 小杉礼子・堀井喜衣(編) 2006 キャリア教育と就業支援 フリーター・ニート対策の国際比較 頸草書房
- 宮城まり子 2006 キャリアサポート 駿河台出版社
- 文部科学省 2006 小学校・中学校・高等学校キャ

- リア教育推進の手引き：児童生徒一人一人の勤労観，職業観を育てるために
- 宗方比佐子 2000 職業興味の構造に関する理論モデルの検討 桜花学園大学研究紀要, 2, 77-88.
- 宗方比佐子 2001 職業興味の構造に関する実証的研究(1) 桜花学園大学研究紀要, 3, 49-56.
- 宗方比佐子 2002 職業興味の構造に関する実証的研究(2) 桜花学園大学研究紀要, 4, 79-91.
- 宗方比佐子 2005 女子学生に対するキャリア開発支援の試み(1) —クラスター分析による職業意識の分類— 金城学院大学論集人文科学編, 1, 166-177.
- 宗方比佐子 2007 キャリア発達(1) 就学前から就職まで 田中堅一郎・外島裕(編) 臨床組織心理学入門 107-128 ナカニシヤ出版
- 宗方比佐子 2009 進路決定の悩み—本多論文への意見論文— 青年心理学研究 21, 136-140.
- 新見直子・前田健一 2008 中学生のキャリア意識と家族・友人に対するコミュニケーション内容の関連 広島大学心理学研究 8, 67-75.
- 三後美紀・金井篤子 2003 高校生の進路選択家庭における自己決定経験とキャリアモデルの役割 経営行動科学学会: 発表論文集(6), 135-139.
- 佐藤純・広田信一・向井暁 2009 中学生のキャリア観に関する研究 Bulletin of Tsukuba Developmental and Clinical Psychology, 20, 43-49.
- Savickas, M.L. 2001 A developmental perspective on vocational behavior: Career patterns, salience, and themes. International Journal for Educational and Vocational Guidance, 1, 49-57.
- Skorikov, V. 2007 Continuity in adolescent career preparation and its effects on adjustment. Journal of Vocational Behavior, 70, 8-24.
- 吉中淳・石井徹・下村英雄・高綱睦美・若松養亮 2003 中学生・高校生の職業知識の広がりと言業関心に関する研究 進路指導研究 22, 1, 1-12.